

156回

稲門フィラテリー切手教室

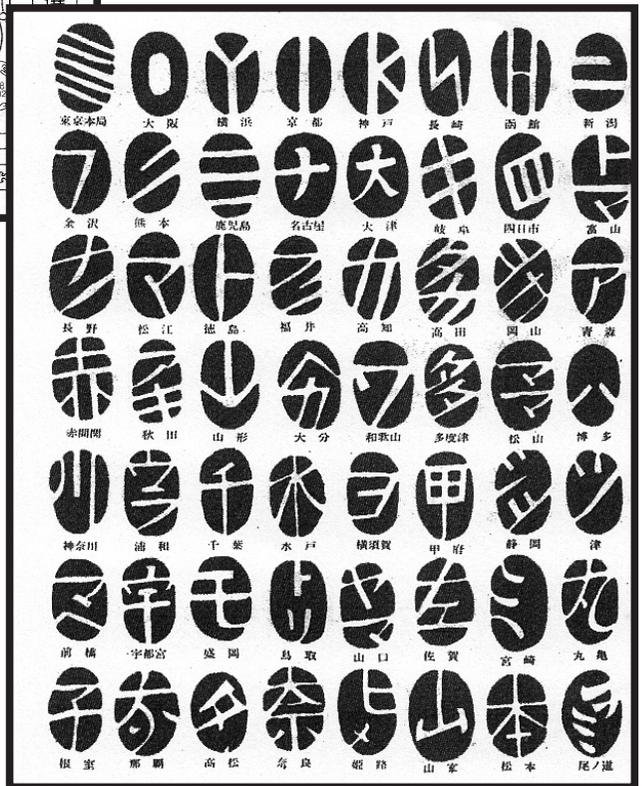
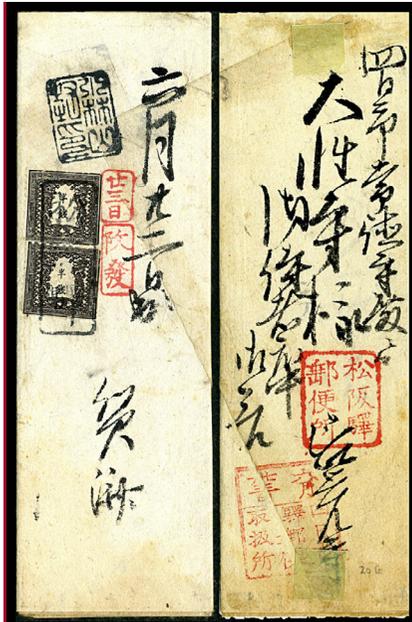
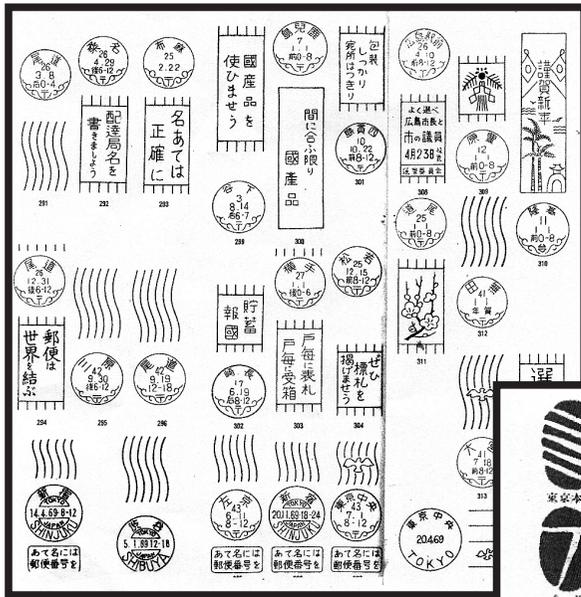
レジュメ

初心者切手教室

2019年11月27日

郵便印・日付印 ①

講師 宮鍋 益治氏



郵便印・日付印

—日本切手百科事典より

- I. 明治初年の郵便印
 1. 大型検査済印
 2. 不統一印
 3. 二重丸型日付印
 4. 記号入番号印
 5. 白抜記号入番号消印、白抜十字印
 6. 小型ボタ印
 7. 大型ボタ印
- II. 丸一型日付印
- III. 丸二型日付印
- IV. 櫛型日付印
- V. 機械日付印
 - (A) 普通日付印
 - (B) 標語入日付印
 - (C) 広告入日付印
 - (D) 年賀用特別日付印
 - (E) 初日用特別日付印
 - (F) そのたの日付印
- VI. ローラー日付印
- VII. 特殊日付印
- VIII. 外国郵便用抹消印
- IX. 外国郵便用の丸型日付印
- X. 外国郵便用書留日付印
- XI. 外国郵便用櫛型日付印
- XII. 外国郵便用現行日付印
13. 外国郵便用機械日付印
14. 外国郵便用ローラー日付印



1. 大型の検査済

郵便創業期の1871~72年(明治4~5)ころ
検査済と表示のある大型縦長の角印が使用

- ① 大型検査済 (楷書体)
- ② 大型検査済 (テン書)
- ③ 大型地名検査済 (淀駅検査済)
- ④ 大型地名検査済 (袋井検査済)

2. 不統一印

1871~75年(明治4~8)ころまで使用

3 二重丸型日付印

1873年(明治6)3月末から大局において使用を開始し、1875年(明治8)末までにほぼ全国の局で使用されるようになった。最初の統一された日付印である。

1888年(明治21)8月まで使用された。

月、日、局名以外の構成因子の組合せにより32の形式に分類されて記号表示されている。

普通因子 国名→K 年号→N 群名→G 便名→B

特殊因子 東京→S 在外国日本郵便局→J 税済→P 事故→Z

年号便号の二つはさらに次のように細分される。

明治七のように「明治」の入った年号 → N1

八年のように「年」の入った年号 → N2

一三のように数字のみの年号 → N3

午前、午後のように漢字のもの → B1

い、ろ、は のように平仮名のもの → B2

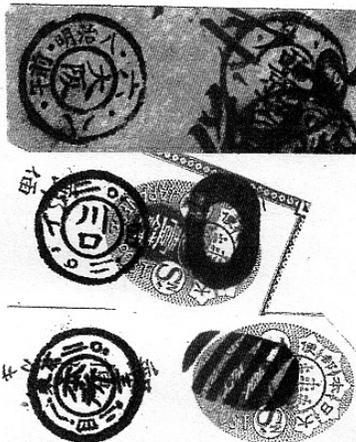
イ、ロ、ハ のように片仮名のもの → B3

事故も次の二つに分けられる 川支延着の表示 → Z1

風波支延着の表示 → Z2

印 の大小の2種 大型(外円22~23ミリ位) → D

小型(外円19~20.5ミリ位) → d



4. 記号入り番号消印 (桜・初期の小判)

略称を記番号という。不統一印の使用をやめ、統一ある抹消印をというので制定されたもの。1874年(明治7)11月末までに交付され、12月から使用された。この印は抹消専用印で、証示印としては二重丸型日付印が主として使われている。

5. 白抜記号入番号消印、白抜十字印、クツワ十字印

1875~81年(明治8~14)、1等局を中心に白抜記号入番号消印、白抜十字印、クツワ十字印など、一連の白抜き小型の円形の抹消専用印が使用された。

二重丸型日付印と二連印の形で使用されたものがほとんどである。使用局は東京(イ1)、大阪(子1)、京都(タ1)、神戸(子14)、長崎(イウ16)、箱根(イケ1)、岡山(イチ1)の7局が確認されている。使用期間は1875~79年(明治8~12)である。

二重丸型日付印+白抜十字印

明治6年12月1日より

明治15年12月31日まで

葉書料金 市外 1銭

市内 半銭

明治16年1月1日より

明治32年3月31日まで

葉書料金 (全国均一) 1銭

白抜き+

白抜十字印

白抜記番印に続いて当時の1等局である東京、大阪、京都、横浜、神戸、長崎、函館、新潟、名古屋、金沢、熊本、鹿児島、高崎、熱田の局で1875年(明治8)から1881年(明治14)まで使われた抹消印。

東京

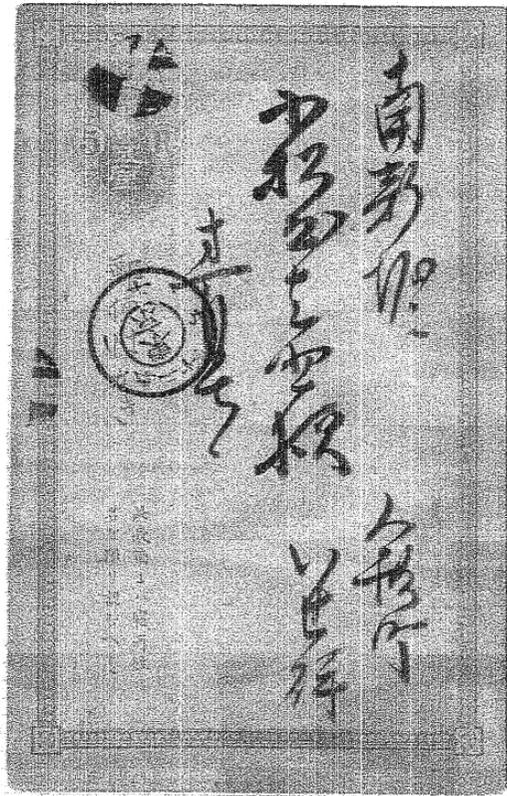
12年1月7日 ち便

(N₁B₂型)

二重丸型日付印

1873年(明治6)3月末から大局において使い始められ、1875年(明治8)末までにほぼ全国の郵便局で使用された統一印。

1888年(明治21年)8月31日まで使われ、9月1日から次の丸一型日付印と交替した。



二重丸型日付印+白抜記番印

明治 6年12月 1日より

明治15年12月31日まで

葉書料金 市外 1銭

市内 半銭

明治16年 1月 1日より

明治32年 3月31日まで

葉書料金 (全国均一) 1銭

子一 (大阪)

白抜記番印

記番印を簡略化して、記号番号のみを白抜きにした小型の抹消印で、大局を中心に使用された。東京(イ一)のほか、大阪、京都、神戸、長崎、函館、岡山の7局が確認されている。

使用期間は1875-79年(明治8-12)。

大阪 摂津

1月12日 に便

(KB₂型)

二重丸型日付印

1873年(明治6)3月末から大局において使い始められ、1875年(明治8)末までにほぼ全国の郵便局で使用された統一印。

1888年(明治21年)8月31日まで使われ、9月1日から次の丸一型日付印と交替した。



二重丸型日付印+大型ボタ印

明治6年12月1日より

明治15年12月31日まで

葉書料金 市外 1銭

市内 半銭

明治16年1月1日より

明治32年3月31日まで

葉書料金 (全国均一) 1銭

白抜きナ

大型ボタ印

小型ボタ印に続いて1881年(明治14)9月
から(局によっては10月から)、二重丸型
日付印と二連印で使われた。

1888年(明治21)8月末に廃止されるまで、
少しずつ使用局が増え、63局が使用した。

名古屋

17年8月9日 口便

(N₃B₃型)

二重丸型日付印

1873年(明治6)3月末から大局において
使い始められ、1875年(明治8)末までに
ほぼ全国の郵便局で使用された統一印。

1883年(明治21年)8月31日まで使われ、
9月1日から次の丸一型日付印と交替した。



二重丸型日付印 + 大型ボタ印

明治 5年12月 1日より
明治32年 3月31日まで

葉書料金(全国均一)1銭

大型ボタ印 神戸

神戸
19年12月5日口便

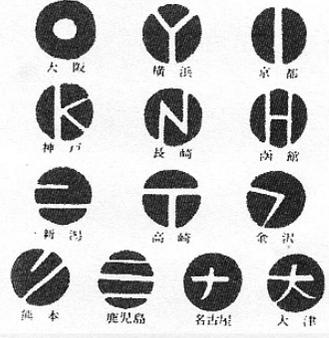
京都
2019年12月5日



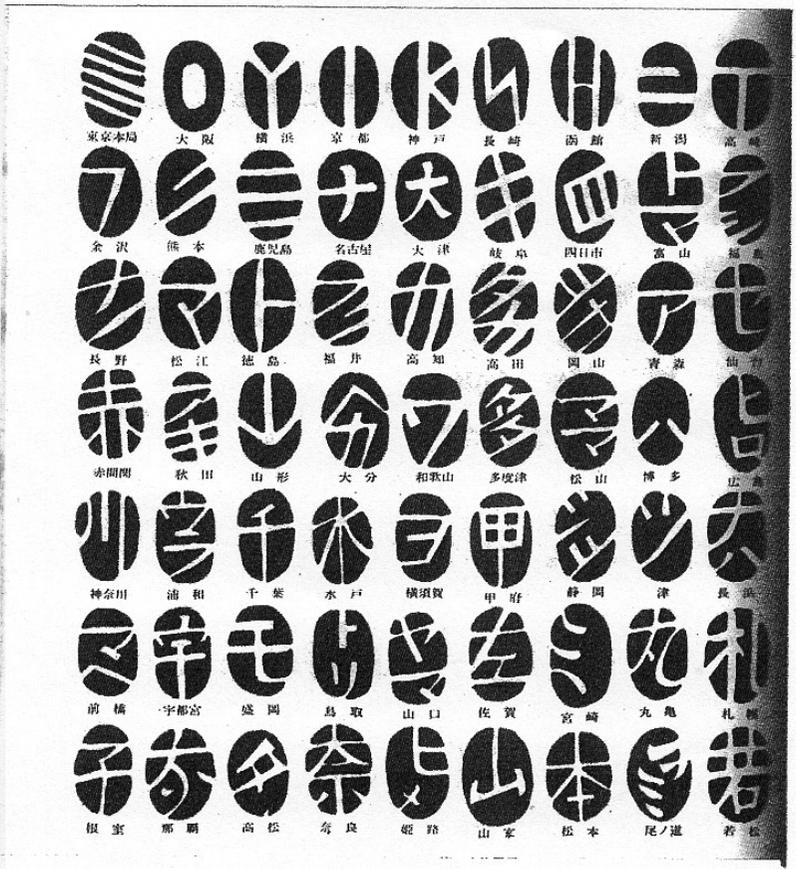
6. 小型ボタ印 (明治12年以前発行の小判)
 1881年(明治14)4月から9月(大阪は10月)、
 東京本局を除く大阪以下の13の一等局で、
 二重丸型日付印と二連印で使用した。

6. 小型ボタ印 (明治12年以前発行の小判)

◎67. 小型ボタ印の全印影



7. 大型ボタ印
 小型ボタ印に続いて、1881年(明治14)9月ないし10月から、二重丸型日付印と二連印で使用された。1888年(明治21)8月末はいしされるまで、少しずつ使用局が増加し、一般局で63、支局で37ある



3

II. 丸一型日付印

二重丸型日付印に続く統一された国内用日付印の第2号で、1888年(明治21)9月1日から、全国いっせいに使用開始された。それまでの二重丸型日付印、ボタ印も廃止されて、この時から抹消専用の郵便印はなくなり、日付印一本に統一された。

丸一型日付印を使用した局は1900年(明治33)末、その他1・2等局では1905年(明治38)末、3等局は1909年(明治42)末まで使用している。

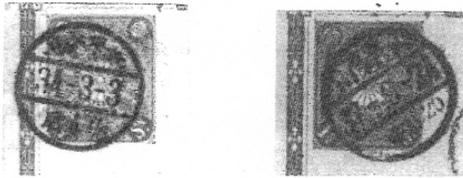
便号は最も多い東京でイ〜ワの13便が知られ散る。



III. 丸二型日付印

1900年(明治33)12月28日より東京で同年末から、東京市内局の多くは1901年(明治34)はじめから、大阪以下の各局では同年途中から順次交付され1905年(明治38)末まで使用された。

使用局は 東京、大阪、横浜、神戸、長崎とこれら各市の市内局で、こんほか、樺太で使用の日付印、および軍事関係、非郵便印などの分野で、種々のパラエティーがある。



IV. 楕型日付印

1,2等局で1905年(明治38)はじめから、3等局で1910年(明治43)のはじめから使用され現行印に変わるまで長期間使用された、国内用郵便印の中心的である

(A) C欄時刻表示

1.一般型 2.台湾型 3.陽線型 4.D欄文字、マーク 5.E欄マーク

(B) C欄地名

1.内地 2.台湾 3.樺太 DE欄なし 4.樺太DE欄楕型 5.非郵便

(C) C欄その他の文字

1.郵便局 2.野戦局・野戦郵便継立所 3.郵便所、艦船郵便所、海軍軍用

4.船内係員 5.係員鉄道郵便、郵便係員 6.非郵便 7.その他

(D) C欄星3個

1.一般 2.船舶、鉄道 3.軍事 4.

(E) C欄××発時刻、上・下便

1.××発時刻 2.上、下便、右書き 3.上、下便左書き 4.××間

(F) C欄空欄

(G) 年賀図案入り

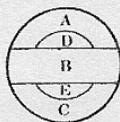
(H) 類似印

楕型日付印

A欄 局名、

B欄 年.月.日

C欄 便・県・★・その他



150

(A) C欄時刻表示

1. 一般型



151



152



153



154



180



181



182

(B) C欄地名

1. 「内地」



187



188

(D) C欄星3個

1. 一般



224



225

(C) C欄その他の文字

1. 郵便局



201



202



203

(E) C欄××発時刻、上・下便

1. ××発時刻



242



243



244



168



169



170



173



174



175



171



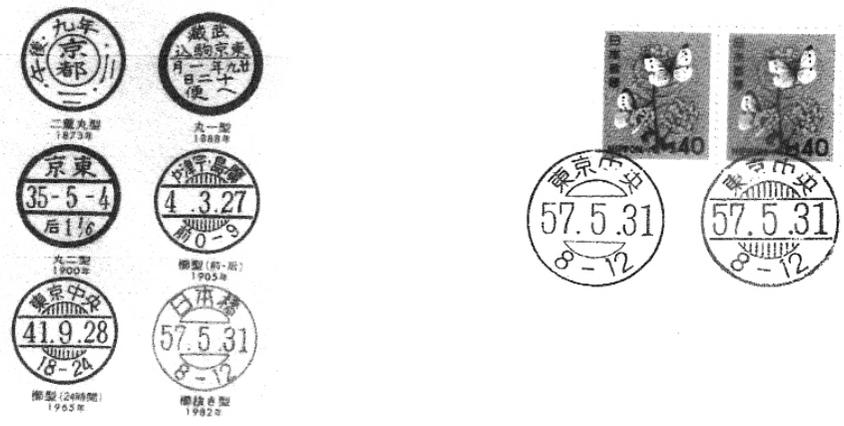
172

5

楯型日付印 → → 試行印 → → 丸型 (和文) 日付印
 明治 39(1906)年 11月 昭和 57(1982)年 5月

試行印

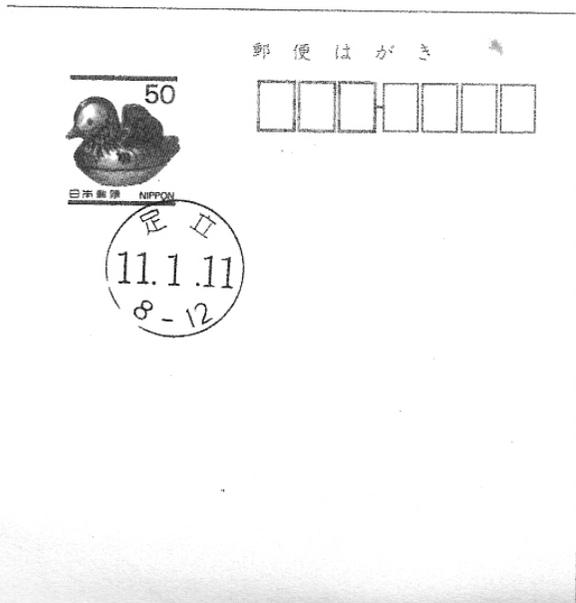
昭和 57年 5月 31日 から楯型印の改正を目的に全国 71局で試行印を使用した。
 外円部の横線と楯の中の普通 9 本前後ある縦線を除いて三日月だけとした。



楯抜き型日付印試行記念
 1982. 5. 31

丸型日付印

試行印の上下の三日月も除ぞいた外円部のみとした。



6

V. 機械日付印

(A) 普通日付印

◎ 林式日付印

逓信博物館勤務の林理作によって発明されたので林式と呼ばれる。

1914年(大正3)東京京橋局が最初で1935年(昭和5)ころまで使用された。

◎ 平川式日付印

平川氏が逓信博物館へ転任後に製作したのが、1925年~35年

(大正14~昭和10)ころ、約20局で使用されたが、小局が多いので残存数が林式より少ない。

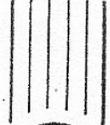
◎ D型 横7本

アメリカ、ユニバーサル社の消印機中、当時の最新型機である

D型を輸入した。最初は輸入されたままの形、すなわち抹消用の波線が7本、日付の部部bが横向きであった。このタイプ使用局は東京日本橋、東京中央、大阪中央の3局で使用期間は1919年~21年(大正8~10)である。



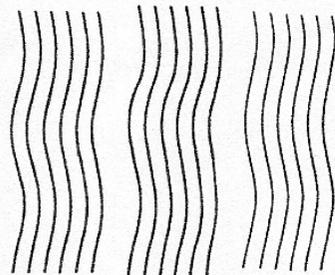
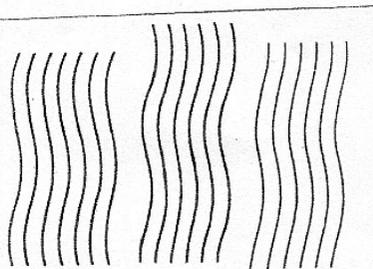
275



276



277



278



279



280



7

二重丸型日付印+白抜十字印

明治 6年12月 1日より

明治15年12月31日まで

葉書料金 市外 1銭

市内 半銭

明治16年 1月 1日より

明治32年 3月31日まで

葉書料金 (全国均一) 1銭

白抜き+

白抜十字印

白抜記番印に続いて当時の1等局である東京、大阪、京都、横浜、神戸、長崎、函館、新潟、名古屋、金沢、熊本、鹿児島、高崎、熱田の局で1875年(明治8)から1881年(明治14)まで使われた抹消印。

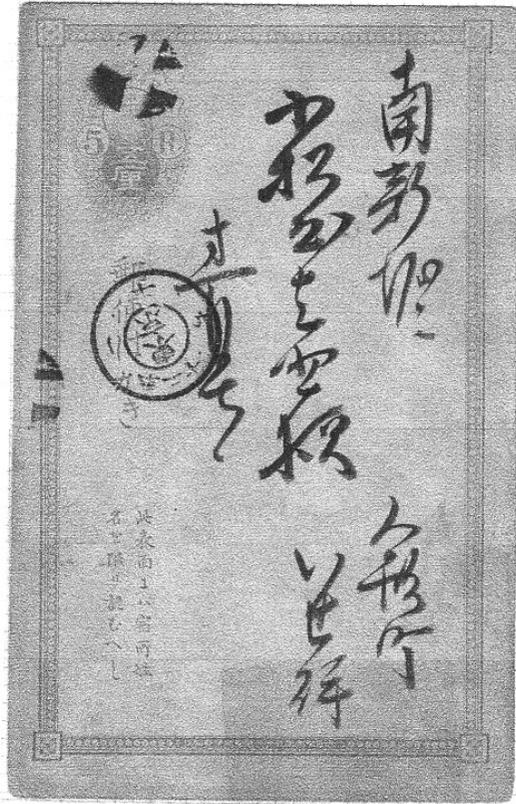
東京

12年1月7日 ち便

(N₁B₂型)

二重丸型日付印

1873年(明治6)3月末から大局において使い始められ、1875年(明治8)末までにはほぼ全国の郵便局で使用された統一印。1888年(明治21年)8月31日まで使われ、9月1日から次の丸一型日付印と交替した。



二重丸型日付印+白抜記番印

明治 6年12月 1日より

明治15年12月31日まで

葉書料金 市外 1銭

市内 半銭

明治16年 1月 1日より

明治32年 3月31日まで

葉書料金（全国均一）1銭

子一（大阪）

白抜記番印

記番印を簡略化して、記号番号のみを白抜きにした小型の抹消印で、大局を中心に使用された。東京(イ一)のほか、大阪、京都、神戸、長崎、函館、岡山の7局が確認されている。

使用期間は1875-79年(明治8-12)。

大阪 摂津

1月12日 に便

(KB₂型)

二重丸型日付印

1873年(明治6)3月末から大局において使い始められ、1875年(明治8)末までにはほぼ全国の郵便局で使用された統一印。1888年(明治21年)8月31日まで使われ、9月1日から次の丸一型日付印と交替した。



二重丸型日付印+大型ボタ印

明治 6年12月 1日より

明治15年12月31日まで

葉書料金 市外 1銭

市内 半銭

明治16年 1月 1日より

明治32年 3月31日まで

葉書料金 (全国均一) 1銭

白抜きナ

大型ボタ印

小型ボタ印に続いて1881年(明治14)9月
から(局によっては10月から)、二重丸型
日付印と二連印で使われた。

1888年(明治21)8月末に廃止されるまで、
少しずつ使用局が増え、63局が使用した。

名古屋

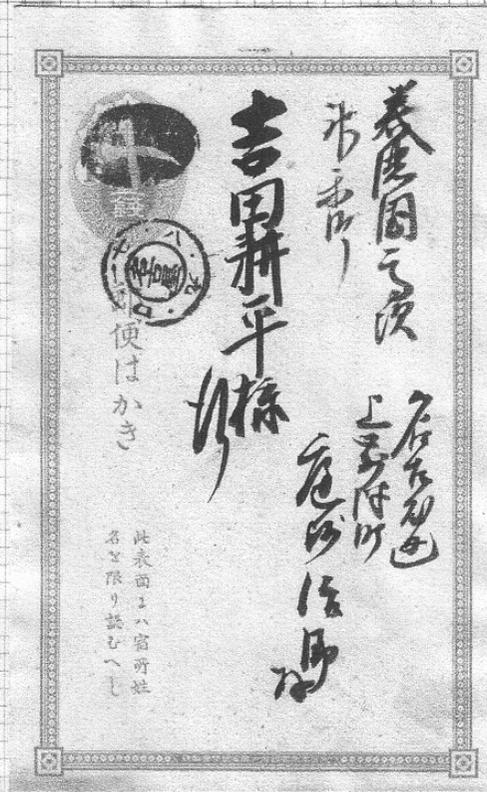
17年8月9日 口便

(N₃B₃型)

二重丸型日付印

1873年(明治6)3月末から大局において
使い始められ、1875年(明治8)末までに
ほぼ全国の郵便局で使用された統一印。

1883年(明治21年)8月31日まで使われ、
9月1日から次の丸一型日付印と交替した。



此表面より宿所姓
名を限り読みへし

二重丸型日付印 + 大型ボタ印

明治 5年12月 1日より
明治32年 3月31日まで

葉書料金(全国均一)1銭

大型ボタ印 神戸

神戸
19年12月5日口便

京都
2019年12月5日



平成 31 年 1 月 20 日

関東郵趣連盟発行

〒343-0821 埼玉県越谷市瓦曽根2-7-57-509

発行人 本間秀雄

編集人 早瀬英雄

関東郵連

東京支局ま二重丸印

北深川と南深川

左の図1の青1銭葉書は、北深川の東京支局ボタ印で証示印は明治17年12月3日へ便のN₃B₃、日本橋区通二丁目宛てである。

右図2の青1銭葉書は、南深川の東京支局ボタ印で証示印は明治18年3月5日イ便のN₃B₃、深川吉永町から日本橋亀島町宛てである。

当初は両局ともにN₃B₃印が使用されていた。葉書に押された北深川のN₃B₃をオークションで見かけたが、入手でき

なかった。N₃B₃の葉書であれば容易に入手できる。

北深川局、南深川局の沿革であるが、もともと明治5年に切手売り捌き所から郵便仮役所になり、明治8年1月には、それぞれ北深川郵便分局、南深川郵便分局になったという。

明治16年5月23日にはそれぞれNo.1郵便支局、南深川郵便支局になり、東京支局ボタ印の使用が始まった。明治18年9月1日には両局が統一され、深川零岸町の局舎に移った。

深川局では明治21年8月末までボタ印が使用され、多くの使用例が見られる。

藤波誠治

